

人輝く

わたしたちの県には、スポーツ・芸術・産業・政治など、さまざまな分野で活躍している人たちがいます。文学の世界では、菊池寛や壺井栄をはじめ、多くの作家が生まれました。また、風光明媚で人情豊かな香川を訪れ、優れた作品を残した作家も多くいます。

きくち ひろし (かん) 菊池 寛



菊池寛記念館提供

1888（明治21）～1948（昭和23） 高松市生まれ 小説家・劇作家

読書が好きで、当時2万冊取められていたといわれる高松図書館の本を高松中学校4,5年生のときに読破しました。英語が得意で単語を読んだらすぐに覚えるので、覚えたページは次々破って食べたことなどたくさんエピソードがあります。

「文壇の大御所」と言われ、雑誌「文藝春秋」を創刊しました。

昭和10年から現在まで続いている芥川賞（純文学）と直木賞（大衆文学）を設けた人でもあります。

主な作品 戯曲「父帰る」・小説「恩讐の彼方に」「形」「真珠夫人」など



「父帰る」の像（高松市）



石碑（中央公園）



菊池寛記念館（サンクリスタル高松）

つばい さかえ 壺井 栄



壺井栄文学館提供

1899（明治32）～1967（昭和42）年 小豆島（内海町）生まれ 小説家

栄は子守や内職をしながら勉強をし、15歳から郵便局や役場で働きました。25歳で上京し、林芙美子や佐多稲子などの影響を受けて作家活動をするようになりました。

小説「二十四の瞳」は何度も映画化され、豊かな自然に包まれ、温かな人々の住む小豆島が脚光を浴びました。「母のない子と子のない母と」などの作品にも平和を願う気持ちがつづられています。香川県下の児童・生徒の優れた文芸作品に毎年壺井栄賞が与えられています。



壺井栄文学館（内海町）



岬の分教場



平和の群像（土庄港）

おざき ほうさい
尾崎 放哉



尾崎放哉記念館提供

1885（明治18）～1926（大正15）年 島根県生まれ 自由律の俳人

放哉は一高・東大で学び、保険会社の要職についていました。しかし、大酒のみの俳句好きは会社勤めには向かず、退職。各地を転々として大正14（1925）年小豆島土庄町にある南郷庵に入りました。

「眼の前魚がとんで見せる
島の夕陽に来て居る」
「いれものがない
両手でうける」（石碑）
「咳をしても一人」
「足のうら洗へば白くなる」など
多くの秀句を残しました。



尾崎放哉記念館（土庄町南郷庵）



尾崎放哉の句碑

とう かずこ
塔 和子



1929（昭和3）年～ 愛媛県生まれ 詩人

13歳でハンセン病を患い、庵治町の国立療養所大島青松園に入所しました。20歳代後半から詩作に取り組み、1999年に詩集「記憶の川で」が高見順賞を受賞しました。

ドキュメンタリー映画「風の舞－闇を拓く光の詩」
（宮崎信恵監督 平成15年）が全国で上映され、
反響を呼んでいます。

魂の園

今が錯覚の春だとしたら
強制的にふるさとを追われた
過酷なあの日は冬でした
私もいま目の前の快さにあやされながら
冬の最中に没した
あなた達のそばに少しづつ
少しづつ近づいています。

生き抜きましょう
暖かい人々の手によって成った
魂の園で
こころおきなく
この肉体から
解放されるために

むこうだ くにこ
向田 邦子



高松市立四番丁小学校提供

1929（昭和4）～1981（昭和56）年 東京生まれ 脚本家・随筆家・小説家

小学6年から高校1年まで高松市で生活しました。テレビドラマ脚本「寺内貫太郎一家」「だいこんの花」など数々のヒット作を生みました。随筆「父の詫び状」には高松で暮らした思い出が語られています。小説「花の名前」「かわうそ」「犬小屋」で第83回直木賞を受賞しました。

なかがわ よいち
中河 与一

1897（明治30）～1994（平成6）年
坂出市生まれ 作家

1938（昭和13）年発表の浪漫主義文学の傑作「天の夕顔」は、英・仏・独・中国語など6カ国語に翻訳されました。

かわにし しんたろう
河西新太郎

1912（明治45）～1990（平成3）年
高松市生まれ 詩人

小豆島の「オリーブの歌」や「讃岐うどん音頭」「広島カープの歌」などを作詞しました。「高松高校歌」など校歌も多数作詞しています。

たき しゅうぞう
高城 修三

1947（昭和22）年～
高松市生まれ 小説家

小説「^{かや}榎の木祭り」で香川県人で初めて芥川賞（第78回、昭和52年）を受賞しました。